

信心正因は、菩提心正因

ご讃題(正像末和讃第四七首、正像末浄土和讃第四八首 注釈版聖典 P608)

不思議の仏智を信ずるを 報土の因としたまへり

信心の正因うることは かたきがなかになほかたし

一、はじめに

「信心正因」も「称名報恩」も共に親鸞聖人の法門であります。

しかし、伝統的には、覚如上人によって切り開かれ蓮如上人によって確立された「信心正因 称名報恩(以下、「信因称報」と略称)の独特の法門の視点から表現する仕方(竜谷教学の「ご常教」)が取られてきた結果、その真の姿が実は明らかになっていないことが指摘されています(Ref: 平成二十一年九月十五日梯 實圓和上ご講義、以下、Ref と略称)。

今、親鸞聖人七百五十回忌大遠忌法要を迎えるに当って、高田派、仏光寺派等でも、改めて、親鸞聖人のみ教えを正確に把握しようという試みがあり、やがて、極めて近い将来、親鸞聖人のみ教えの真の姿が明らかになることであらう。

本願寺宗門のご常教()が覚如上人から蓮如上人に至って確立され、三業惑乱後いよいよ一面的に固定化されるに至った背景には、自らは主体的に考えようとせず、体制内に安住する立場を求め続けて今日に至った日本人の悪い体質があったことを思わないではおれません。

宗門ご常教の欠陥が宗門外部から指摘された暁にも決してあわてないためには、ご常教と親鸞聖人のみ教えがどのように異なっているかを把握し、親鸞聖人のみ教えの真実を正しく頂戴しておくことが大切であ

り、またそうすることこそ、聖人のみ教えを世界へ子や孫に伝えていく上で極めて大事なことであります。

因みに、親鸞聖人の「信心正因」は、「称名報恩」と対比するような小さなものではありません。「信心正因」の最たる根幹は、明恵上人の論難を覆すために明らかにされた「菩提心正因」にあるからです(Ref)。

註 観学寮刊「安心論題綱要」は、ご常教の立場から親鸞聖人の法門を表現されていますので、親鸞聖人のみ教えの真の姿が見えなくなっています。

二、覚如上人によって切り開かれ蓮如上人によって確立されたご常教

「信因称報」の立場は、親鸞聖人ご消息第一通に根拠を置いています(Ref)。因みに、第一通には「信心のさだまるとき往生また定まるなり」(注釈版 P735)と記されています。

この視点でみる「信心正因」は信心と称名とを正因と報恩に分けます。即ち「信心のさだまるとき、往生また定まるなり」と言われたように、本願を信受する初一念に往生成仏の因が成就する(信心正因)から、その後の称名は、正因決定後の営みであって、信一念に往生を決定して下さった仏恩を報謝する営みである(Ref)」というのです。

信心は往生の定まる正しき因であって、その後の称名はそれを感謝する営みに留まるのだという理解であります。

(考察)御消息というのは、関東のお同行をお相手にして、そのときの話題に焦点を当てて平易に説き明かされたものと解されます。だからといって、お念仏を疎かにされてはいません。ご消息を注意深く拝読しますと、実際にはお手紙の初めに「信心の定まる主体を「真実信心の行人」と称していらっしゃいます。「真実信心の行人」は、行信不離・不二の行人であることは間違いないこととあります。覚如上人は、これを捨象してしまっいらっしゃるか

窺われます。これによって、称名は、信心獲得後のみで捉えられ、信心獲得プロセスへの称名のダイナミックな関わりを一切捨て去るといった大きな過ちを残したことになると窺われるところであります(堅田付記)。

三、信心正因は、「菩提心正因」であるとする親鸞聖人のお立場

親鸞聖人は基本的に法然聖人の伝統に立つに「念仏往生」のお立場ですから教行信証は、決して「信因称報」の法門で表現されてはいません。「信の巻」では、飽くまで「念仏」は、法として表されているからです。

その理由は、親鸞聖人の上では、念仏の行と信心とが相い離れず(行信不離)、その本質は名号であるところから両者は一つ(行信不二)であると見られていたからです。

では、親鸞聖人の「信心正因」は、どのような法門だったのでしょうか。これは、「菩提心正因」であるというのが親鸞聖人の特徴であります。そのゆえは、梅の尾の明恵上人(実は、親鸞聖人と同い年だったと伝えられます)が、法然聖人の『選択集』に対して「菩提心を否定するとは何事か、聖道門の僧侶を二河白道の群賊・悪獣にたとえるとは何事か」と徹底的に論難されたことに対して、これを覆す意味で、「菩提心には、他力の菩提心があるよ。これを決して見落としてはなりません。」と、たしなめられた法門だったのであります。

では、その法門をお訪ねしてみますと、親鸞聖人の「信心正因」は、信心そのものが成仏の因であるというのが中心課題になっています。

その体系は「本願の信心(三心即一の信楽)には、如来の智慧のお徳(至心)と慈悲のお徳(欲生)が円満している如来回向のお心であるから往生成仏の因となる」(Ref)というのであります。ここで、

智慧のお徳(智徳)は、願作仏心(自利成就)であり、

慈悲のお徳(悲徳)は、度衆生心(利他成就)であり、

「智徳」と「悲徳」は大菩提心を構成するのであって、この大菩提心こそが成仏の正因だということのであります。

こうして、親鸞聖人の「信心正因」は、「称名報恩」と対比するような小さなものではなく、「菩提心正因」だということが明らかになりました。

菩提心正因の菩提心は人間の起こす智慧や慈悲のようなちっぽけなものではなく、如来回向の智慧と慈悲であり、これによって煩惱成就の凡夫が往生浄土即成仏してお救いに与ることになるのであります。

尚、信文類の菩提心釈は、明恵上人をたしなめていらっしゃる法語であります。菩提心については、親鸞聖人は二双四重の教判をなさり、菩提心は聖道門の菩提心だけには限らないことを示して、明恵上人を決して批判はしていらっしゃるのであります。菩提心正因は、親鸞聖人の広いお人柄と大乘仏教体系全体を見通した仏教者としての大きな責任の上に立った御言葉だったと窺うことができるのであります。合掌

(後書)この一文はご常教の現実と親鸞聖人の真のみ教えをお聞かせに与った得難い御講義を元に取り纏めました(文責堅田)。ご常教は信心獲得後の称名には報恩感謝が伴われる段階に視点を当てていらっしゃいます。その半面、信心獲得には称名念仏が関与しないとして信心獲得にダイナミックに関わる称名の位置づけを捨象されている点を憂うものであります。合掌。

正覚寺平成二十一年度報恩講 十月二十四日(土)～二十五日(日)
正覚寺仏教壮年会例会 毎月第一日曜午後八時より
正覚寺仏教婦人会例会 毎月十六日午後七時より
著作編集兼発行元 りびんぐらいぶず編集室(浄土真宗本願寺派 正覚寺内)
〒520-0501 大津市北小松四五二番地 ☎&Fax077-596-0166 住職 堅田 玄宥

<http://syohgakuji.web.fc2.com/> E-Mail:mhkatata@pluto.dti.ne.jp